〈幼児教育〉

友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わうための援助の工夫
ー様々なごっこ遊びを通してー

宜野湾市立はごろも幼稚園　教諭　山口　ルミ

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年，幼児を取り巻く環境は，少子化，核家族化，共働き世帯の増加により人間関係の希薄化が進み，他者との関わりが苦手な子の増加や，自制心，耐性や規範意識が十分に育っていないなどの課題が指摘されている。また，昨今においては，新型コロナウィルスによる様々な影響で，友達と遊びの楽しさを十分味わえない状況も見られる。

こうした背景を踏まえ，幼稚園教育要領前文では，「多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え，豊かな人生を切り拓き，持続可能な社会の創り手となることができるようにするための基礎を培うことが求められる」とあり，第２章ねらい及び内容「人間関係」では（２）「身近な人々と親しみ，関わりを深め，工夫したり，協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい，愛情や信頼感をもつ」と示されている。

また，遊びの中で幼児が発達していく姿を捉えた「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（３）「協同性」でも「友達と関わる中で，互いの思いや考えなどを共有し共通の目的の実現に向けて，考えたり，工夫したり，協力したりし，充実感をもってやり遂げるようになる」とし，今日の幼稚園においては，幼児の人と関わる力を育てていくことが求められていると捉える。

本園の幼児の実態として，気持ちが穏やかでやりたいことを見つけて遊びを楽しむ子が多い。しかしその一方で，様々な友達と積極的にコミュニケーションをとり，気持ちや考えを言葉や動きで表したりすることが苦手な幼児が多い。また，関わりの中でトラブルが生じた際に折り合いをつけたり，我慢をすることや気持ちを合わせたりするなどの調整する力の弱さが見受けられる。さらに，家での遊びがゲームや動画視聴に偏り，様々な場面で美しいものや心を動かす出来事に触れる体験や，夢中になって遊ぶ体験の乏しさが感じられる。

これまでの筆者自身の保育を振り返ってみると，幼児同士が関わりながら遊べるよう日常的に見直しを図ってきた。しかし，友達と一緒に遊びを進める中で，様々な出来事を通して，嬉しい，悔しい，悲しい，楽しいなどの多様な感情体験を味わい，友達との関わりを深めていくための援助の工夫が不足していた。

また，幼児個々のアイディアや発想を友達間や集団の場で活かしきれていなかったことが反省点として挙げられる。

そこで本研究では，本園の幼児の実態を踏まえ，幼児が友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わうことができるようになることを目的とする。まず，幼児が教師との信頼関係を構築し，幼児同士の関わりを深める中で，幼児期にふさわしい「ごっこ遊び」などの表現活動を体験できるようにしていく。次に，教師が援助の工夫を行うことで，幼児なりのやり方で試行錯誤を繰り返していくようにする。この二つの手続きを経て「ごっこ遊び」を通した援助の工夫を明らかにし、実践的方法を導き出したい。

Ⅱ　研究構想図

国教育施策
○幼稚園教育要領
・幼稚園教育において育みたい資質・能力
・幼児期の終わりまでに育ってほしい姿
○幼児理解に基づいた評価

県教育施策
○黄金っ子応援プラン（第２期沖縄県子ども子育て支援事業計画）

市教育施策
○第四次宜野湾市総合計画基本構想
○教育振興基本計画
○宜野湾市教育大綱
○学び合い，未来を切り拓く人材の育成

園教育目標
○感動する子（どきどき）
○挑戦する子（わくわく）
○仲よく遊ぶ子（にこにこ）

→

幼児の実態
○やりたいことを見つけて楽しむ子が多い。
○何をして遊べばよいかわからずぼんやりとしている子もいる。
○コミュニケーション力に弱さを感じる。
○実際に触れながら体験することや夢中になって遊ぶ体験の乏しい子がいる。

教師の実態
○幼児同士関わりながら遊べるような環境構成の工夫を図ってきたが，友達と一緒に遊びを進める援助の工夫が不足している。
○個々のアイディアや発想を友達間や集団の場で活かしきれていない。

↓

めざす幼児像
○元気で明るいはごろもっ子
○話をよく聞き，自分の考えを言えるはごろもっ子
○思いやりがあり，みんなと仲良く遊べるはごろもっ子
○あいさつが上手なはごろもっ子

↓

研究テーマ

友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わうための援助の工夫
－様々なごっこ遊びを通して－

↓

研究仮説
保育実践において，幼児が教師や友達と一緒に様々なごっこ遊びを通して幼児同士の関わりを深める中で，幼児期にふさわしい遊びや表現活動を体験し，教師が援助の工夫を行うことで，幼児なりのやり方で試行錯誤を繰り返し，友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わうことができるであろう。

↓

研究内容

研究テーマについての理論研究
1　幼児教育における「遊び」について
2　ごっこ遊びについて
3　教師の援助とは

検証保育に向けての研究
1　園児の実態把握
2　教材研究，環境構成
3　保育指導案の作成

↓

検証保育の計画・実施・分析・考察

↓

研究のまとめ・研究成果と今後の課題

Ⅲ　研究内容

１　幼児教育における「遊び」について

（１）幼稚園教育要領における「遊び」とは

「幼児期の教育は，生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり，幼児期の特性を踏まえ，環境を通して行うものであることを基本とすること」は，幼稚園教育要領の幼稚園教育の基本でも示されている。平成３０年３月の幼稚園教育要領改訂において，学校教育では，子ども達が様々な変化に積極的に向き合い，他者と協働して課題を解決していくことの重要性が求められた。

幼稚園教育では小学校以降の教育との連続性が明示され，幼児が教師との信頼関係を基盤として，自分のやりたいことに集中して取り組むことができ，幼児自身が充実できるような幼児期にふさわしい生活を展開することで，「知識及び技能の基礎」「思考力，判断力，表現力等の基礎」「学びに向かう力，人間性等」の幼稚園において育みたい資質・能力を育むことが求められており，これらは遊びを通しての総合的な指導によって育成される。

その学び方として，「主体的・対話的で深い学び」の重要性が記されているが，幼児にとって主体的・対話的に学ぶ場面とは，「遊び」の場面であると考える。

「主体的な学び」とは，幼児が「何だろう？」「やってみたい！」という気持ちに突き動かされながら遊び，その遊びはどうだったか振り返ってみたり，今後の見通しを立てたりすることである。「対話的な学び」とは，遊びを通してできたものをみんなで見たり，見たものを通して思ったことを伝え合ったたりすることである。そして「深い学び」とは，活動を通して何かに気づいたり，教師や友達と意見を出し合いながら深めていくことであると考える。

様々な遊びを意味づけするためには，単に「楽しかった」だけで終わらせるのではなく，遊びで得た学びをどのようにつなげ，連続させていくかが重要な鍵となる。

幼児の遊びには幼児の成長や発達にとって重要な経験が多く含まれている。そのため，幼児の自発的な活動としての遊びにおいて，幼児が心身全体を働かせ，様々な体験を通して心身の調和のとれた全体的な発達の基礎を築いていけるようにすることが大切である。幼稚園教育においては，幼児期の特性から，遊びを通した総合的な指導の中で，感性を豊かに働かせて身の回りにあるものの良さや美しさを感じ取ったり，不思議さに気付いたりして，できるようになったことを活かしながら，様々な体験をすることが重要であると言える。

（２）遊びの中で「人と関わる力を育む」とは

幼稚園教育要領，第２章ねらい及び内容「人間関係」では，下記のように述べている。

〔他の人々と親しみ，支え合って生活するために，自立心を育て，人と関わる力を養う。〕
（２）身近な人と親しみ，関わりを深め，工夫したり，協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい，愛情や信頼感をもつ。

人と関わる力の基礎は，自分自身が保護者や周囲の人に温かく見守られているという安心感から，人に対する信頼感を持つようになり，その信頼感に支えられ自分自身の生活を確立していくと考えられる。

右図１で表した，幼稚園において人と関わる力が育まれる過程に示すように，幼児は自分の思いを表現し，その表現が受容されると喜びを感じ，共に遊びを作っていく楽しさを味わっていく。楽しさを味わっていく中で様々な表現に繋がり、友達と遊びこみ，継続していく過程に様々な葛藤やいざこざ，仲直りなどの活動を経て「人と関わる力」の育ちが期待できると考えられる。

また，幼児の中には語彙が少なく，そもそも表現することが苦手な子や，人に感情を伝えることに恥ずかしさを感じて，表現することを拒む子もいる。そのような幼児には，遊びを通して自己主張の仕方やけんかした時の悲しみや怒りなどの感情を表す経験をすることで，相手の気持ちに気付き，思いやりの気持ちを少しずつ育んでいけるように教師が援助していくことが大切である。

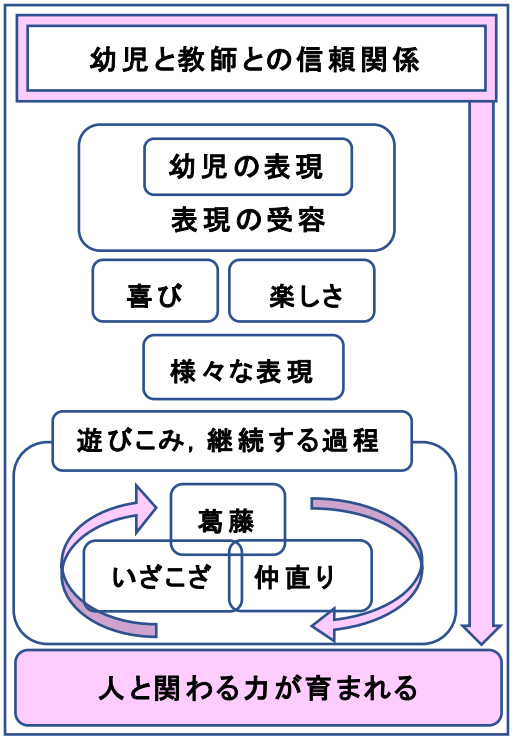


図１　幼稚園において人と関わる力が育まれる過程（筆者作成）

他にも，自分自身の気持ちをしっかり表現できないと，感情の矛先を物や人に向けてしまうことがある。例えば，突然友達の使っているおもちゃを取り上げて投げたりする幼児がいるが，これは一緒に遊びたい，あるいはおもちゃを使いたいという気持ちからおもちゃをとって投げるという行動をとってしまったと考える。このような幼児には，様々なことを体験・共感し，感じたことを教師自ら豊かに表現することで，表現が苦手な幼児への援助となるようにする。教師自身が手本になり，幼児に嬉しいという気持ちを伝えることで，幼児自身に喜びを実感させ，表現したくなるような援助の工夫に結び付けていく。

加えて，幼児自身が他者の意見や思いを自ら取り入れて柔軟な視野を身に付けることができるようにする必要もある。教師は幼児の表現を受容しながら，さらに想像力を喚起するような働きかけも必要であることを踏まえ，個に応じた援助をしていく。

（３）幼児期の協同性について

幼稚園教育要領「人間関係」内容では，下記の通り示されている。

(8) 友達と楽しく活動する中で，共通の目的を見出し，工夫したり，協力したりなどする。

このように，気の合う仲間との関わりを基盤にして，目的やイメージを共有する仲間との関わりの中で，自分と違う考え方に出会ったり，異なる意見を聞き，折り合いをつけながら選択・決定する経験を「協同」という。

協同性に着目してみると，下記の通りである。

(3)友達と関わる中で，互いの思いや考えなどを共有し，共通の目的の実現に向けて，考えたり，工夫したり，協力したりし，充実感をもってやり遂げるようになる。

図２で示したように，幼児期の協同性は，教師との信頼関係を基盤に他の幼児との関わりを深め，思いを伝え合ったり試行錯誤したりしながら一緒に活動を展開する楽しさや，共通の目的が実現する喜びを味わう中で育まれていくものである。

幼稚園教育要領解説では，このように明記されている。

幼児は，友達と関わる中で，様々な出来事を通して，嬉しい，悔しい，悲しい，楽しいなどの多様な感情体験を味わい，友達との関わりを深めていく。

このように，生涯の人間形成の基礎を培う幼児期にこそ，幼児同士が一緒に遊ぶ楽しさを味わうことは大変重要であると考える。

そこで，テーマの「友達と一緒に遊ぶ」ことは，幼児期の協同性に含まれるものとして捉えることとする。

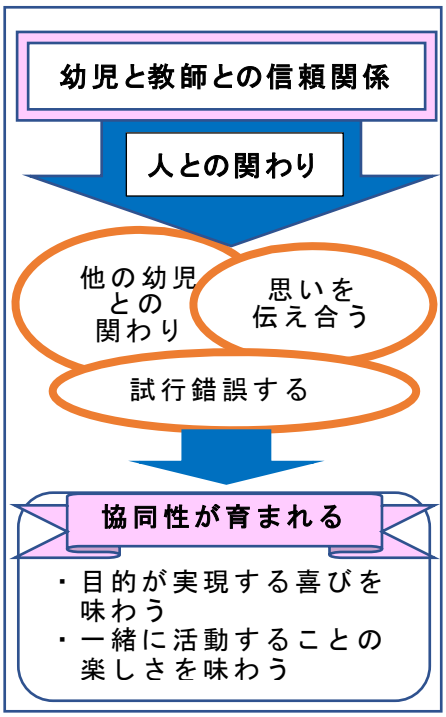


図２　協同性が育まれる過程（筆者作成）

２「ごっこ遊び」について

「ごっこ遊び」とは，『保育用語辞典第５版』によると「子どもが日常生活の中で経験したことの蓄積から，つもりになって『～のような』模倣をし，身近なものを見たて，役割実現するというような象徴的遊びをいう。」と示されている。

幼稚園での「ごっこ遊び」の場合，各々の幼児が持ちよるイメージを擦り合わせ，試行錯誤しながら遊びを充実していく活動が必要となる。誰がどのような役割で何をどう見たてているのかを幼児相互が理解し合い，他者とイメージを共有するだけでなく，自分と異なる立場を経験することで，遊びを通して他者存在に気づくこととなる。

このことから，「ごっこ遊び」はイメージを共有するための有効な遊びであると言える。「ごっこ遊び」を通して，自分の考えを表したり友達を受け入れたりする経験をすることで幼児同士が関わりを深めていき，様々な表現活動を体験する中で，友達と一緒に遊びを楽しめるようになっていくであろうという理由から、幼児期にとってふさわしい遊びである，と考える。

３　教師の援助とは

（１）「協同的経験」を支える教師の役割

幼児が友達と一緒に遊べるようになり，集団としての育ちが進み始める４歳児頃には「協同的な遊び」の基礎となる「協同的経験」を幼児が十分に体験し，協同性の芽生えを養っておく必要がある。

協同性を培う上で，みんなで一緒に手遊びをする，ダンスを踊る，絵本の読み聞かせをみんなで聞くという一斉保育も，学級の仲間を共同体として意識させていく大きな素地になる。筆者の学級活動の中でも，「イス取りゲーム」や「だるまさんが転んだ」などの様々な遊びを度々取り入れてきた。その結果，幼児はみんなで役割を交替して遊ぶ，順番に並ぶ，グループに分かれて競い合うといった活動を意識するようになってきた。

この「協同的経験」を支える教師の役割として，次のようなことが重要である。

①幼児一人一人が学級の中で自分の存在を認められる経験を味わえるように配慮すること。

②教師が幼児の思いを「温かい言葉」でつなぎながら保育を進めていくこと。

③「話し合う」活動を大切にしながら，幼児の思いを引き出していくこと。

特に，４歳児は自分の思いを明確に言葉にして伝えることが十分でないため，友達との関係の中でうまく自分の思いを言葉にして伝えられず，トラブルになることが多い。そのため，「～したらどうかな？」「～だとうまくできるかもね」などと声かけし，教師が幼児同士の思いやイメージを「温かい言葉」で表現していき，つなぎながら保育を進めていくことが大切である。

また，幼児一人一人が友だちと遊びや活動をする中で，困難にぶつかり，その解決に向けて教師の助けを借りながら試行錯誤を繰り返し，「～の時に○○したな。」「～したらうまくいったな。」という多様な経験を今後の活動に生かすことができるようにする。このような経験を重ねていくことで，５歳以降の「協同的な遊び」の中で，幼児自身が自分達で目的を見つけ，その目的に向かって試行錯誤しながら課題を解決していくことができるようになっていくと考えられる。しかし，その際に教師の思いを幼児に強制し，遊びのイメージを作ってしまうことは幼児の想像力を奪うことになりかねないため，十分留意する必要がある。

幼稚園教育要領の領域「人間関係」内容の取扱い（２）では，次の通り述べている。

集団の生活の中で，幼児が自己を発揮し，教師や他の幼児に認められる体験をし，自信をもって行動できるようにすること

このように，教師は幼児同士がお互いを認め合える機会をつくり，必要に応じて援助していくことが必要である。

（２）イメージをつなげていくための教師の援助

幼児は心を動かされる体験をすると，その感動を教師や友達に伝えようとする。受け止める相手がいることで，表現する意欲が高まり，表現することを楽しむようになる。そして，幼児なりの思いやイメージしたことを友達と共有しながら表現し合うようになる，とされている。

佐藤厚(2014)は，「幼児期にイメージの世界でたくさん遊んでおくことで，『こうなりたい』『これをしたい』という思いが満たされる」と述べている。自分の思いが満たされることで，次は外からの要求，例えば，友達の気持ちを受け入れることに関して，「受け入れよう」という気持ちが働くと考えられる。まずは，自分の気持ちが受け入れられた経験があって初めて，他のことに興味・関心を抱くようになる。つまり，幼児期にどれだけ自分の思いを表現し，それを受け入れてもらえたかということが大切であると考えられる。

これらのことから，幼児が友達とイメージを共有し合う遊びの重要性を踏まえ，幼児期にふさわしい表現を体験するための教師の援助の在り方として，西久保礼造(1985)が述べたイメージをつなげていくための教師の働きかけを次頁表１に示し，保育に活かしていく。

表１　幼児期にふさわしい表現を体験するための教師の援助の在り方（筆者作成）

（ア）幼児の中に内在しているイメージを引き出す働きかけについて 友達の中で自分を安心して出せないでいる幼児は，自分の中に内在しているイメージが想起しにくい状態である。したがって，幼児の中に断片的に内在しているイメージをつなげたり，想起しにくい状態にあるイメージを引き出したりする働きかけをすることによって，個々の幼児が自分のイメージで動けるようにすることが必要となる。
（イ）幼児たちが共有できる場やものを提供する働きかけについて ままごとコーナーで例えると，何人かの幼児達が場で遊びを始めることで，そこにある遊具などによって，ままごとについて抱いているイメージが誘発されて動くようになる。また，それが一定の遊び場の枠の中で行われることで，幼児同士のイメージがつながる可能性が生まれてくる。
（ウ）幼児の働きかけを受け止め，返していく働きかけについて 教師は，初めは幼児からの働きかけを個別に受け止めることで，幼児の承認欲求を満足させ，幼児との関係が安定するように努めている。しかし，教師と幼児の関係が安定してくると，教師は幼児からの働きかけを個別に受け止めるだけではなく，それをまわりの幼児に返していくようにすることで，友達同士で承認し合ったり，友達同士がつながったりする機会を与えることになる。
（エ）絵本などの児童文化財によってイメージを与える働きかけについて 幼児の遊びが停滞しているようなとき，幼児たちが遊びに対して新しいイメージをもてるようにする方法の一つとして，絵本やパネルシアターなどの児童文化財を活用する方法がある。この場合も，それらをさりげなく取り上げ，その内容を幼児たちに楽しませるようにすることが大切で，強制的な見せ方は避けるべきである。絵本が刺激となって，幼児たちのイメージがつながっていくことが期待されるため，児童文化財を，イメージを共有するための手段や道具として活用し，援助を行っていく。

（３）「ごっこ遊び」における教師の援助

『幼稚園教育要領解説』領域「表現」内容（８）では「幼児がしだいにイメージを共有し合い，『〇〇ごっこをしよう』などと遊ぶことができるようになってきた際に，教師はイメージの世界を十分に楽しめるように，イメージを表現するための道具や用具，素材を十分に用意し，幼児と共に環境を構成しておくことや，幼児が安心して自分なりのイメージを表現できるように，教師は一人一人の発想や素朴な表現を共感して受け止めることが大切である」と記されている。

幼児は「ごっこ遊び」が大好きで，対象に憧れたり関心を持ったりすることで自分を同化し，人やモノや場に自ら関わり「世界」を作り出していきながら想像性，　創造性，社会性，構成力，知的理解力，操作性などを高めていく。

そこで大切なことは，幼児が「ごっこ遊び」を展開する中で，自分の考えを表したり友だちを受け入れたりする経験を重ねていくことで，幼児期にふさわしい遊びや活動を体験していくように援助することである。

（４）「ごっこ遊び」を通した発達の援助

「ごっこ遊び」は，幼児期特有の遊びであり，１年を通して，いつでも，どの年齢でも見受けられる遊びである。そこで，発達の側面に焦点をあてると，４歳児は友達の存在を感じながら遊ぶようになってくる時期である。楽しそうな雰囲気に仲間入りしようとし，場所や遊びの設定などおもしろそうなことを積極的に取り入れて，剣やお面など同じモノを持つ，同じ動きをするなどの行動が増えてくる。

また，４歳児は遊びのテーマが広がり，幼児なりに遊びのイメージを共有しながらその中で自分のやりたいことをそれぞれが楽しみ，しだいに友達との違いに気付いていくのである。

つまり４歳児は，自分たちの遊びの場を作ることや遊びに使うモノを作ること，同じモノを持つことで仲間意識が芽生え，それが後々友達としての関係性が大きく育っていく発達段階だと考えられる。教師の援助で複数の「ごっこ遊び」がつながり，周りの友達に波及することで自分の遊びがさらに広がり，楽しく感じられるよう援助していくことが重要である。

Ⅳ　検証保育

検証保育指導案

令和２年 11 月 26 日～12 月 10 日
男児 10 名 女児５名 計 15 名
保育者　山口　ルミ
指導助言者　岡花　祈一郎

１　活動名　「友達と一緒に好きな遊びを紹介しよう」

２　ねらい（教育要領：人間関係のねらい　より）

○身近な人と親しみ，関わりを深め，工夫したり，協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい，愛情や信頼感をもつ。

３　内容

○友達のよさに気付き，一緒に活動する楽しさを味わう。

４　活動設定の理由

幼児は幼稚園での生活を共に送る中で，学級の友達の特性についてはお互い気付いている。今回友達と一緒に好きな遊びを紹介するという活動の場を設けることで，今まで関わりの薄かった友達と関わる機会が増え，互いの心情や考え方などの違いにも次第に気付いてくると考える。その特性に応じて関われるようになると，互いの良さが生かされ一緒に活動する楽しさが味わえるであろうと捉え，本活動を設定した。

（１）教材観

友達とイメージを共有し，楽しんできた遊びを学級全体でつなげる場合，幼児がこれまでの経験を生かしながら友達と一緒に活動を楽しむ貴重な場になるであろうと考える。そこで幼児が友達や教師との関わりを通して自己主張をし，そのやり取りの中で相手の感じ方に気付いていく。そして，互いのよさがわかり，時には意見の相違や葛藤を体験することで，自分の気持ちに折り合いをつけながら一緒に遊びを進めていくようになる。そのような体験を積み重ねることで人との関わり方を学んでいくが，さらに自分達で考えを構成し，実行してやり遂げるという過程が大切であると考える。

また，これまでの遊びをドキュメンテーションなどの活用を通して振り返ることは，自分とは違う他者の活動を知ることや，友達同士の関わりを深め活動の視点を広げる機会にもつながる。

よって，友達と一緒に好きな遊びを紹介するという共通の目的を通して，話し合う経験や友達を認める体験，共感する体験を重ねることは，友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じることのできる効果的な活動である。

（２）幼児観

学級の実態として，気持ちが穏やかで落ち着いている子が多く，自分の好きな遊びを見つけてそれぞれ楽しむことができていたが，友達と関わろうとせずに一人遊びを楽しむ子の姿や，友達の気持ちを想像できず，トラブルになる子の姿も見られた。

友達の存在に気付けるように様々な活動を取り入れることで，みんなで役割を交替して遊ぶことや，順番に並ぶ，グループに分かれて競い合うといった活動にも参加できるようになってきた。その一方で，自分の思いのままに行動して活動から抜けてしまう子，気持ちが乗らないと一緒にやれない子の姿も依然として見られた。

（３）指導観

友達と一緒に遊びを楽しむためには，自分の思いを表現できるようになると共に，相手の気持ちを読み取り，自分の気持ちをコントロールする，自己抑制力を育むことも必要であると考える。

そのため，教師は幼児との信頼関係をしっかりと築き，自分の気持ちを思う存分表現できるような土台を日々構築していく必要がある。そして，幼児の言葉やイメージを幼児同士が共有できるよう，教師があたたかい言葉でつないでいくことが大切である。また，学級全体の話し合いの中で，一人一人の意見を大切にし，思ったことが自由に発言できる雰囲気づくりに努める必要がある。

５　活動の評価

①友達と一緒に楽しみながら，自分達の選んだ遊びを紹介することができたか。

②活動の状況に応じて，自分の気持ちに折り合いをつけたり，友達と気持ちを合わせたりしながら活動できたか。

6　検証指導計画

期	日時	○ねらい・内容	◎教師の援助　☆環境構成
1	6月 ～ 8月	○教師や友達に親しみ安心感をもつ ○友達を感じながら自分なりの見立てで遊ぶ。 ・様々なごっこ遊びを楽しむ。 ①1年を通して～おままごと～ ②6月ピコピコテレパシー ③7月三匹のこぶた（絵本） ④8月おおきなかぶ（絵本）	◎なりきって遊べるように，遊びに必要な物や材料を準備しておく ☆絵本，ペープサート，CD，など ☆かぶ，衣装，帽子 ◎幼児の気持ちを汲み取りながらやりたいことが実現できるよう，個々の発達に合わせて，援助する。
2（検証①②）	9月 ～ 11月	○自分のしたい遊びを見つけ，自分なりに遊びを楽しむ。 ・様々なごっこ遊びを楽しむ。 ⑤9月しゅりけん忍者 ⑥　　三匹のヤギのガラガラどん ⑦10月ハロハロハロウィン ⑧11月きめつごっこ	◎作りたい物やイメージした物が実現できるように，作り方を知らせたり手伝ったりし，自分でできた喜びを味わえるようにする。 ☆折り紙の手裏剣，はちまき ☆ガラガラどんシアター，　☆ペープサート ☆画用紙，折り紙，ペン，はさみ，セロハンテープ，廃材など
3（検証③④⑤）	11/26 （木） 11/27 （金）	○友達と思いを出し合って遊ぶ。 ・新入園児体験保育があることを知り，お客さんや年長児に何を見せたいかみんなで話し合う。 ・ドキュメンテーションを通して，これまでの他児の活動を知る。 ・ごっこ遊びに必要な材料集めをする。	◎体験入園に向けて，幼児一人一人のイメージを受け止め，やりたいことが実現できる方法を探り，方向づけられるようにする。 ◎やりたいことに向けて，どのような準備が必要なのか考え，イメージを絵に表したり，必要な物を書いたりしながら共有する。 ☆ドキュメンテーション，様々な素材を用意する。
	11/30 （月） ～ 12/4 （金）	○友達とイメージをつなげて遊ぶ。 ・ごっこ遊びに必要な道具を作る。 ○遊びの場を自分達で考えながら構成する。 ・体験保育の流れを確認し，お互いに役割を交替することで新入園児の気持ちを体験する。 ・みんなで保育室の環境を見直し，修正しながら整える。	◎友達とイメージをつなげて楽しめるように，遊びに必用な物や道具を一緒に準備する。 ☆新聞紙，画用紙，折り紙，ペン，はさみ，セロハンテープ，ビニールテープ，廃材など ◎相手の思いや自分とは違う考え方があることに気付けるような言葉がけをする。 ◎様々な意見を聞き，これからどうしたらよいのか，みんなで考える。 ◎それぞれの良いところを言葉にして全体に知らせ，お互いの気持ちに気付けるようにする。
	12/7 （月） 12/8 （火）	体験保育1日目スタート ○自分の役割がわかり，友達の動きを意識したり，気持ちを合わせたりする楽しさを味わう。 ○楽しかったことや，感じたことを話し合う。 ○今日の反省から，明日に向けて必用な物を考え，準備する。 ・みんなで保育室の環境を見直し，修正しながら整える。	◎友達とのつながりを楽しんでいる様子に共感したり，言葉に出して伝えたりすることで，幼児一人一人の頑張りを認める。 ◎必要に応じて教師が仲間に入り，遊びの方向性が見いだせるようにしていく。 ◎支援が必要な子には，無理のないように，その子が満足できる方法を選びながら，友達と遊ぶ楽しさを味わえるようにしていく。 ◎体験後に幼児の発言を丁寧に拾いながらみんなで共有し，今後の活動へとつなげていく。
	12/9 （水） 公開保育	体験保育3日目 ○身近な人と親しみ，関わりを深め，工夫したり，協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい，愛情や信頼感を持つ。 ・友達のよさに気付き，一緒に活動する楽しさを味わう。 ・楽しかったことや，感じたことを話し合う。 ・今日の反省から，明日に向けて必用な物を考え，準備する。	◎友達とのつながりを楽しんでいる様子に共感したり，言葉に出して伝えたりすることで，幼児一人一人の頑張りを認める。 ◎必要に応じて教師が仲間に入り，遊びの方向性が見いだせるようにしていく。 ◎支援が必要な子には，無理のないように，その子が満足できる方法を選びながら，友達と遊ぶ楽しさを味わえるようにしていく。 ◎体験後に，一人一人の発言を丁寧に拾いながら，ドキュメンテーションなどでみんなの遊びを共有し，明日の活動へとつなげていく。
	12/10 （木）	体験保育4日目 ○振り返りに参加し，思いを伝え合い友達の良さを認めたりする。	◎体験保育後に振り返りの時間を設け，みんなで一緒に遊ぶ充実感を味わえるようにする。

7　公開保育指導案

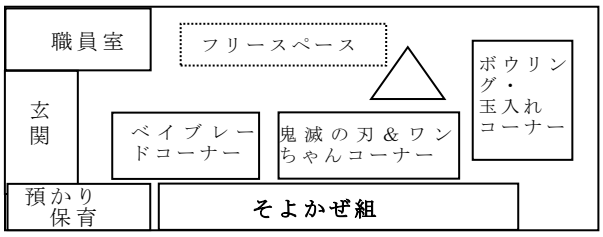
宜野湾市立はごろも幼稚園そよかぜ組　　日案　　令和２年 12 月 9(水)　山口ルミ

幼児の姿

・遊びのコーナーを作ることで，お互いにコーナーを回ったり，年長児や新入園予定児に遊びを紹介する姿が見られる。
・お互いの遊びを体験することで，遊びの紹介方法を工夫する姿が見られる。
・戸外では鬼ごっこや大縄跳び，ねずこごっこ，ままごとを友達同士楽しむ姿が見られる。

ねらい	内容
○身近な人と親しみ，関わりを深め，工夫したり，協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい，愛情や信頼感を持つ。	○友達のよさに気付き，一緒に活動する楽しさを味わう。

活動仮説　○友達と様々な遊びを楽しむ中で，自分の思いを伝えたり，相手の気持ちに気付いたりすることで幼児同士の関わりを深め，一緒に遊ぶ楽しさを味わうことができるであろう。

時間	◎予想される子どもの活動	☆教師の援助　★環境構成
8:15 8:30 8:50 公開保育 ↓	**◎登園する** ・先生や友達に朝の挨拶をする。 ・所持品の始末をする。 （靴，かばん，帽子，名札，出席ノート） **◎体験保育に必要なものを用意する。** ・コーナー毎に使うものを用意する。 ・衣装に着替え雰囲気を味わう。 **◎好きな遊びを紹介する。**（室内活動） ✿きめつのやいばコーナー ・なりたいキャラクターを聞いたり，お薦めのキャラクターを紹介し，衣装や面，小道具を貸し出す。 ✿ボーリング・玉入れ・折り紙コーナー ・ボーリングや玉入れを体験し，倒したら折り紙をプレゼントする。 ✿ベイブレードコーナー ・レゴブロックやブロックで作ったコマを紹介し，回す体験をする。 ・友達と一緒に活動を楽しむ ・自分らしさを発揮して活動を楽しむ。 ・友達と一緒に相談したりしながら遊びを進める。 ・困った時やわからない時には，友だちや教師に助けを求める。 ・友達と一緒の活動に参加できない場合には，個々の興味に応じて遊びを楽しむ。	☆笑顔で挨拶を交わしながら，視診，健康状態を把握する。 ☆身の回りの事ができているか確認し，必要に応じて援助する。 ☆体験保育時に必用な物や，進め方のイメージが共有できるように，話し合いを前日にしておく。 ☆興味を持って活動に参加できるよう，声かけを工夫する。 ☆安全面に十分配慮し，教師も一緒に遊びを楽しむ。 ☆思い思いの遊びを楽しめるよう，様子を見ながら必要に応じて援助をする。 ☆初めて出会う他者に対し，話し方や接し方に配慮できるような声かけをする。 ☆グループから離れてしまう子には個別に声をかけ，活動に興味を持てるように配慮する。 ☆遊びの中でトラブルが起きた場合は，自分の思いを伝えたり，相手の気持ちに気付いたりすることができるように援助する。 ★何かが必要になった時にはすぐに作ったりできるよう様々な素材，用具を準備しておく。 ☆学級のみんなといると楽しい，と感じられるような雰囲気作りをする。
9:15 頃	**◎好きな遊びを楽しむ。** 室内→ブロック，ままごと，製作，劇，ペープサート，こま，楽器遊びなど 戸外→総合遊具，砂場，鬼ごっこ，ねずこごっこ　サッカー，かくれんぼ，色水，一本橋，運動遊び　など 遊戯室（雨天時）→ソフトブロック，運動遊びなど ・自分のやっている遊びに興味を持っている新入園予定児がいたら声をかけ，一緒に遊びを楽しむ。 ・遊びのイメージを膨らませながら作ったり，表現したりする。	 ☆お客さんが少なくなってきたら，コーナーをたたみ，それぞれ好きな遊びを楽しむ。 ☆教師も遊びに加わり，体を動かす楽しさや心地よさを味わえるようにする。 ☆運動あそびでは個々の頑張りを認め，できるようになったことを共に喜び合う。 ★楽器，ペープサート，CD，音響機器など，興味に合わせて用意しておく。 ☆幼児の興味・関心に応じて臨機応変に対応できるようにする。
9:50 10:00 公開保育 終了	**◎片づけをする** ・使った道具をみんなで協力し，片付ける。 ・水分補給，トイレ，手洗いを済ませる。 **◎今日の活動を振り返る** ・楽しかったこと，頑張ったこと，気付いたこと等について発表したり，友達の話を聞いたりして共有する。	☆幼児と一緒に片付けながら，きれいになると気持ちがいいことを伝え，みんなで協力して片付けができるようにする。 ☆楽しかったことや経験したことなどを話せる場を持ち，自分の話を聞いてもらえるうれしさや楽しさが味わえようにする。 ☆幼児の発言に耳を傾け，幼児の理解度に合わせて伝えたいことを全体に知らせていく。

反省・評価	①友達と一緒に楽しみながら，自分たちの選んだ遊びをお客さんに紹介することができたか。 ②活動の状況に応じて，自分の気持ちに折り合いをつけたり，友達と気持ちを合わせたりしながら活動できたか。

８　教師の援助の工夫

１１月からの検証保育に入る前に，子ども達の遊びの様子や興味・関心と照らし合わせながら，再度室内環境の見直しを行った。

★環境構成の工夫	☆教師の意図◎幼児の姿，変容
★楽しい雰囲気を味わえるよう，キャラクターの衣装や小物を準備する。	☆好きなキャラクターになりきって気持ちを盛り上げ，楽しい雰囲気を味わってほしい。 ◎最初は主要なキャラクターの衣装を数枚用意して飾ったが，「この衣装作りたい！」と興味・関心を持って衣装づくりに取り組む姿が見られる。 ◎剣や小物も，好きなキャラクターによって模様が異なるため，細かいところまで再現しようと夢中になっている姿が見られる。 ◎衣装や剣などの同じモノを介して，それぞれの役に応じてなりきる姿が見られる。
★写真をドキュメンテーションとして掲示することで，幼児の活動の様子を知らせる。	☆友達の遊びの様子を写真や文字にして知らせることで，様々な活動に興味を持つようになってほしい。 ◎写真を興味深く見る姿が見られる。 ◎友達の遊びの様子をみて，「これ，どうやってやるの？」と質問する姿が見られる。 ◎「これやったよね」「またやりたいね」と友達同士話す姿が見られる。
★イメージした物をすぐに作れるよう製作コーナーを充実させる。	☆自分のイメージした物を，製作で思う存分表現してほしい。 ◎自分で材料を選び，試したり工夫したりしながら自分のイメージを表現しようとする姿が見られる。 ◎衣装に合わせた小物を作ろうと，様々な素材を選んで製作する姿が見られる。 ◎プレゼントする折り紙を，「どれがいいかな」と本を見ながら作る姿が見られる。
★楽しい気持ちを表現できるようCDやデッキ，楽器や手人形を用意する。 ★季節感を味わえるよう，クリスマスコーナーを用意する。	☆子どものイメージや遊びの流れに応じて，新しい環境にも目を向けてほしい。 ☆リズム遊びをきっかけに，自分なりのイメージをふくらませてほしい。 ◎自分たちの気持ちを盛り上げようと，なりきっているアニメの曲をかける姿が見られる。 ◎音楽に合わせ，ダンスを踊ったり，歌を歌ったりする姿が見られる。 ◎手人形を使い，声色を変えたりしながら人形になりきって友達に話しかける姿が見られる。 ◎音やリズムに合わせて楽器を鳴らし，楽しんでいる。
★木の実やどんぐりゴマを展示したりすることで自然物を使ったおもちゃに興味を持てるようにする。	☆様々な物に目を向け，遊びに活かしてほしい。 ◎どんぐりに爪楊枝を刺したどんぐりコマを見つけて，楽しそうに回す姿が見られた。 ◎ベイブレードコーナーにも持っていき，レゴブロック以外にもコマとして作れそうな素材はないか探す姿が見られた。 ◎どんぐりの形の違いや，爪楊枝の刺されている場所の違いを見て，どれが回しやすいのか試行錯誤する姿が見られる。

Ⅴ　検証の方法と手続き

１　幼児の実態把握について

入園前に実施した保護者への電話聞き取り調査(令和２年４月実施)の結果から，入園前は新型コロナウィルスによる外出自粛規制のため，スマートフォンやゲーム機器などによる動画視聴を主な遊びとする子が全体の約半数に及んでいた。家族以外の人と接する機会も減り，入園後すぐの園児の実態からも人間関係の希薄化が見られた。

入園後は自粛規制も緩和され，家庭において戸外で遊ぶ割合が入園前の約２割から約５割に増え，園での遊びの経験が家庭の遊びに好影響を及ぼしていると考えられる。

このような状況を鑑みて，幼稚園での身近な人と関わって遊ぶ機会をきっかけに，家庭との連携を図りながら研究実践へと活かしていきたい。

２　幼児理解の方法について

幼児理解を深めるためには保育の振り返りや記録が重要である。日々の保育を振り返り，個々の幼児の心の動きや育ちを理解することでよりよい保育へと繋げていく。

よって，検証保育においても保育や幼児の育ちの筆記記録を基本に，写真やビデオなどで記録を残していく。さらに，教師間の情報交換，共通理解など多様な視点で振り返ることが幼児理解を深めていく上で大切である。幼児理解の方法としてエピソー

ド記述（鯨岡　2009）を用いて，幼児の心の動きを捉え，個々の幼児理解を深めながら援助の工夫を行っていく。

さらに，幼児の遊びの様子を可視化し，幼児と周りの環境を繋いでいく援助の工夫としてドキュメンテーションを作成し，活用する。

3　教師の援助の工夫について

これまでに述べた友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わうための教師の援助を踏まえ，下記図３で示す保育を振り返る過程での５つの視点で保育を振り返り，改善していく。

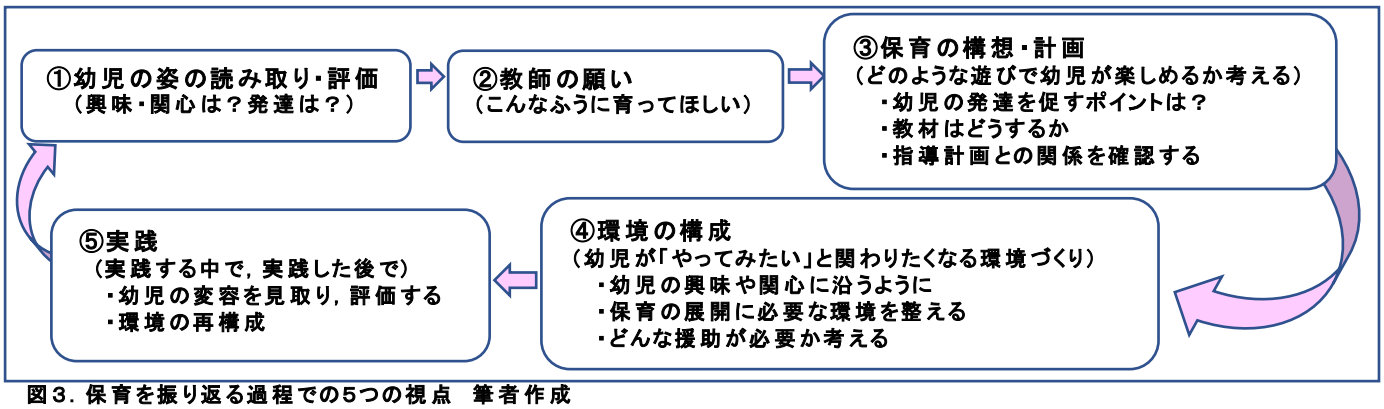


図３．保育を振り返る過程での5つの視点　筆者作成

4　評価の視点について

検証保育の評価では，幼児の「人との関わりが育まれる過程」に視点をおき，幼児が試行錯誤しながら遊びを楽しむ様子にスポットをあて，誰とどこでどのように遊びを進めているかを観察し，記録していく。その中で，幼児が教師や友達と関わる様子，遊びの中で試行錯誤する過程の様子を踏まえ，幼児の人との関わり方の変容を捉える。幼児が友達と意欲的に遊ぶ姿を観察し，その遊びの中でどのような過程を踏んでいるのか，そのプロセスに焦点をあてて育ちを捉えることで，評価の視点とする。

Ⅵ　仮説の検証

研究仮説

保育実践において，幼児が教師や友達と一緒に様々なごっこ遊びを通して幼児同士が関わりを深める中で，幼児期にふさわしい遊びや表現活動を体験し，教師が援助を工夫することで，幼児なりのやり方で試行錯誤を繰り返し，友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わうことができるであろう。

1　保育の振り返りとエピソード記述から幼児の姿を捉える

研究テーマに基づいた保育実践を行い，保育の振り返りやビデオ記録，エピソード記述を通して幼児の姿や変容をもとに検証する。その対象を「学級全体」と「抽出児 A」「抽出児 B」「抽出児 C」とする。

「抽出児 A」に関しては，ごっこ遊びを通して人と関わろうとする意欲が高まった様子から変容が見られた最適な幼児だと捉える。「抽出児 B」「抽出児 C」は，ドキュメンテーションの活用や教師の保育後の振り返りや声かけなどの援助を通して見られた変容が大きい幼児と捉える。

ごっこ遊びを楽しむ中で，幼児が教師や友達と関わる様子や試行錯誤する様子を捉え，幼児の心の育ちに焦点をあてる。また，研究仮説に基づく教師の援助の工夫を通して，検証の効果性や幼児の変容を捉えていく。次の表では教師による援助の工夫を網掛け「　　」，幼児の心の動きや変容を二重線「＿＿＿」，反省や課題を波線「～～～～～」で示していく。

２　検証前の姿

幼児の検証前の様子	教師の願い
学級全体 そよかぜ組は，保育園より入園５名，初めての集団保育１０名の計 15 名学級である。入園当初より気持ちが穏やかで，やりたいことを見つけて遊びを楽しむ子が多い。しかし，様々な友達と積極的にコミュニケーションをとって気持ちや考えを言葉や動きで表したりすることや，関わりの中でトラブルが生じた際，折り合いをつけたり我慢をするなどの気持ちを合わせたり調整する力の弱さが見受けられる。	・友達と一緒に遊びを進める中で，様々な出来事を通して，嬉しい，悔しい，悲しい，楽しいなどの多様な感情体験を味わって欲しい。 ・友達との関わりを深めていくための援助の工夫をすることで，幼児個々のアイディアや発想を友達間や集団の場で活かして欲しい。
抽出児 A ４月入園の男児。集団保育の経験なし。入園当初は緊張が強く人見知りも激しいため，教師や友達との関わりを拒絶しているように見えた。あいさつはするが，自分の気持ちを表す言葉はなかなか言えなかった。学級活動の時間もリズム遊びや集団遊びに参加することはなく，遠くからやりたくなさそうに眺めていた。	・早く幼稚園に慣れ，安心して園生活を楽しんで欲しい。 ・自分の思いや感じたことを思う存分表現できるようになって欲しい。 ・様々なことに興味・関心を持って取り組み，友達や教師と一緒に遊ぶ楽しさを味わって欲しい。
抽出児 B ４月入園の男児。集団保育の経験なし。入園前から幼稚園での生活を楽しみにしており，好きな遊びをすぐに見つけ，じっくりと取り組み楽しみながら遊ぶことができる。明るく人懐っこい性格で，誰からも好かれるため友達も多いが，人をよく観察しているので，自分に迷惑をかけそうな幼児には近づこうとしない傾向がある。	・様々な人と関わることで，自己主張のぶつかり合いによる葛藤を味わったり，友達と共に過ごす楽しさを味わって欲しい。 ・自分の思い通りにいかない経験をすることで友達の存在や良さに気付き，気持ちを調整しながら我慢する力をつけて欲しい。
抽出児 C ４月入園の男児。集団保育の経験なし。おとなしく，人見知りが激しいため，信頼できる友達に頼りきりになってしまい，できないことがあるとすぐに泣いて友達や教師に助けを求め，自分でやることを諦めてしまうことが多い。	・いろいろな遊びを楽しみながら，自分で決めたことを最後までやり遂げようとする気持ちを持ってほしい。 ・友達と一緒に遊ぶ中で，試したり工夫したりする楽しさを十分味わって欲しい。

３　検証保育

①教師との信頼関係を築き，幼児同士の関わりを深めた検証場面　　場所：そよかぜ組室内

忍者ごっこ（９月）

活動仮説

保育実践において，幼児が教師や友達との信頼関係を結び，幼児期にふさわしい「ごっこ遊び」や表現活動を体験できるようにしていくことで、幼児同士の関わりを深めることができるであろう。

対象：学級全体　抽出児 A

≪背景≫

写真１　一人遊びを楽しむ A

A は自営業の父，専業主婦の母，２歳下の妹の４人家族。これまで集団生活の経験はなく，幼稚園が初めての集団生活である。入園後，登園するものの表情が硬く，なかなか母と離れられずにいることが続く。母親とバイバイした後は，一人でブロックを組み立てたり，砂場で何かを作ったり，図鑑を眺めて過ごすことが多く，教師や友達との関わりを拒絶しているような姿が見られた。学級活動の時間では，リズム遊びや集団遊びをやりたくなさそうに眺め，参加することはほとんどなかった。

私は A の行動を否定せずに受け止め，「やりたくなったらおいで。待ってるよ。」と A の気持ちに寄り添いながら待つことで，A との信頼関係を結ぶことにつながったと思われる。

２学期が始まり、好きな遊びが一緒になった子と過ごす時間も増えてきたがまだまだ一人で過ごすことが多い A。この日は忍者が出てくる絵本を興味深そうに見ている。私が「忍者好きなの？」と声をかけると「うん，忍者にはいろんなのがいてさ，色によって得意な技が…。」と忍者について知っていることを嬉しそうに話す姿が見られた。

≪エピソード≫

リズム遊びの際に，「忍者ってなんじゃもんじゃ」という曲を紹介する。忍者になりきって，投げられた手裏剣をよけたりする踊りに A も楽しそうに参加している姿が見られた。

好きな遊びの時間，小さな箱に折り紙で作った手裏剣を何個か入れどんな反応があるか様子を見ているとＡが箱をみつける。「これ，かっこいいなあ。本物みたいじゃん。」と言ってきたので，「忍者でござる」と私が何個か手裏剣を投げて見せた。Ａは「おお！すごい！俺もやる！」と喜び「今度は俺が投げるよ，先生よけて」「じゃあ次は先生が投げるよ」と二人で遊んでいた。

そこへ，「おもしろそう！やらせて！」とＤとＥがやってきて４人での忍者ごっこが始まった。Ａも楽しそうに手裏剣を投げたりよけたりしている。教師が「こんなのもあるよ」と手裏剣が貼られたハチマキを見せると「いいね！」と忍者ごっこがしばらく続き，次第に４人５人と遊ぶ仲間も増えていった。

写真２　忍者ごっこを友達と楽しむＡ

≪考察≫

入園してから一人でいることを好み，他児との関わりを持とうとしなかったＡ。Ａの行動を否定せずに受け止めＡの気持ちに寄り添いながら待つことで，Ａとの信頼関係を結ぶことにつながったと思われる。

学級活動の際も，以前は教師に対し否定的な態度をとることが多かったが，Ａの気持ちに寄り添う形で無理のないように進めることで，少しずつ前向きな行動が見られるようになってきた。

写真３　数人で劇遊びを楽しむ

幼児一人一人の気持ちに寄り添い，安心感と信頼感を持って園生活を過ごしさらに友達との関わりを楽しめるような援助を行うことで，一緒に遊ぶ楽しさを味わって欲しいと願う。また，今まで学級活動や友達に興味を持たなかったＡだが，関心を寄せる忍者を取り上げ，教師がモデルとなり忍者ごっこにつなぐことで，相手とのやり取りが生まれ，楽しさを感じられる活動へとつながっていった。その後も忍者ごっこを通して気の合う友達ができたことで，忍者の持ち物や衣装に興味を持ち製作しようとする姿が見られた。

特に手先が不器用で折り紙に興味を持たなかったＡが，信頼関係を築いてきた教師や友達のＤとＥを頼って手裏剣作りに挑戦する姿には私も嬉しさを感じた。自ら手裏剣のハチマキをつけて忍者ごっこを楽しみ，自信を持って遊びを進める姿が見られるようになってきた。この後，忍者が登場する『おおきなかぶ』の手遊びを紹介し，劇ごっこに発展していく。その際にも忍者役で登場し，おおきなかぶごっこを 10 人程で楽しんでおり，友達関係に広がりが見られるようになってきた。今後の検証保育に向け，子ども達の遊びを共有することで他児の刺激となり，遊びを広げるきっかけづくりをしていきたい。

②イメージを共有して遊ぶようになる検証場面　　場所：そよかぜ組室内

きめつごっこ（11 月 10 日）

活動仮説

「ごっこ遊び」の場において，幼児の興味・関心を捉え，実態に即した環境構成や，自分の考えを表したり，相手の思いに気付き，受け入れたりできるような言葉かけの工夫をすることで，イメージを共有して遊ぶことができるであろう。

対象：学級全体　抽出児Ａ

≪背景≫

運動会で踊ったアニメの曲に合わせ，楽しそうに踊る子ども達。Ａは今日も友達とたたかいごっこを楽しんでいる。その中の何人かは「○○の呼吸，○○！！」とアニメのキャラクターになりきっている。そこで私は，ごっこ遊びをさらに楽しめるような環境を設定しようと考えた。

≪エピソード≫

教師がアニメのキャラクターの衣装や剣などを飾るコーナーを作っていると，幼児それぞれが工夫していく製作が始まった。

Ａは最初製作には参加しなかったが，友達が続々と衣装や剣を作り，たたかいごっこが始まると，「先生，剣だけでいいから一緒に作って。」と慌てたように私に訴えてきた。「どんな剣にする？」私が答えると，自分の好きな模様や柄を選びながら製作を楽しむ姿が見られた。剣が出来るとすぐにたたかいごっこに参加する。

写真４　製作をする様子

しかし，たたかいごっこが盛り上がるにつれ，剣で相手を叩いてしまう子が出てきた。叩かれて「痛いから本当にあてるのはやめて！」と言える子もいたが，Ａは「こんなの全然痛くない。」と強がっている。そのうちに何度か叩かれ涙目になっているが「こんなのに負けたらだめだ。」とブツブツ言う姿が見られた。そこで私はたたかいごっこを一度止め，「お友達の顔をよく見てくれる？楽しそうかな？」と子ども達に問いかけた。すると，お互いの顔を見合って「Ａが泣きそうな顔している。Ｄも楽しくなさそう。」と言う声が聞かれた。私が、

「そうだね。楽しく遊ぶのはいいけど，遊ぶ相手がどんなふうに思っているかしっかりと顔も見て考えて欲しい。それに，剣で叩かれた人も嫌だっていう気持ちをちゃんと言った方が，相手に伝わると思うよ。」と言うと，Aは「わかった。」と落ち込んでいる様子で答える。

そこで私が「剣があたらないようにする方法何かない？」と提案すると，Bが「わかった！スローモ-ションとかは？」と目をキラキラさせて言った。何人かは「何，それー？」と言っていたがBは「見といて。こんなだよ！」と技を出す瞬間だけ動きをゆっくりにして見せた。「いいね～。」と言う子ども達。それから，キャラクターになりきるたたかいごっこは続いた。

さらに，「先生，実際に鬼も倒したい！鬼も作ったらどう？」という案で鬼退治コーナーができ，たたかいごっこという一つの遊びから，様々な遊びへの連続性や発展性が見られた。

写真５　製作した道具を身に付けて遊ぶ様子

写真６　たたかい方を試行錯誤する様子

≪考察≫

運動会でやったリズムを学級で楽しんでいたことから，遊びの中でも活かすことはできないかと考えた。教師が子ども達の興味や関心を捉え，衣装や小物づくりを提案することによって，「やってみたい！」と興味・関心を持って楽しむことができたと考える。また，衣装や小物づくりに必要なもの（新聞紙カラーポリ，折り紙，塗り絵，お面の材料）を予め準備しておくことで，子ども達もスムーズに遊び始めることができ，そこから様々なものを使って衣装や小物づくりを楽しむ姿が見られた。そこで，教師が幼児の興味や関心を捉え，それに合わせた環境構成の工夫（事前の準備）が大切であると考える。

また，友達との関わりが増えてきたAだったが，人に弱みを見せたくないという面があり，悔しさや悲しさを感じても，言葉に出して表現することがほとんどなかった。これまでの忍者ごっこやたたかいごっこを見ていても，友達に行動を合わせたり気持ちを伝えたりすることは見られず，自分が困るとその場から離れ，別の場所で自分だけで考え込んだりしている姿が見られた。

本時はいつものメンバーより人数が多く，学級の仲間であってもほとんど関わりのない子もたくさん入っていたため，Aにとっては余計に自分の気持ちを伝えにくい状況だったのだろう。他の子は叩かれるとすぐに「痛い！」と訴えることができていたため，必死にこらえるAの姿がとても痛々しく見えた。そこで，教師が間に入ってお互いの気持ちを聞き，言葉にして相手に伝える援助が必要であると感じた。このケースで，自分の気持ちを素直に表現することが苦手なAも，自分の思いを伝えないと自分自身が困ってしまうという葛藤体験を味わった。Aにとっては自分で伝えるにはまだ難しい段階でもあるため，教師がAの思いを代弁することで，自分の気持ちを伝え，互いの気持ちを分かり合えることができたのではないかと考える。

この後も，トラブルについて話し合うだけでなく，状況を良くするためにできることを幼児同士に試行錯誤させることで，気分を変えて遊びに向かうことができたのではないかと考える。

また，今後はドキュメンテーションを見ることで他の子がしている遊びや衣装づくりなどに気づき，他の遊びにも興味・関心が広がり，人との関わりが広がるような環境構成の工夫を図っていく必要がある。

③ドキュメンテーションを通して人と関わる力を育む検証場面　場所：そよかぜ組室内、フリースペース

遊びを紹介しよう（12月９日）

活動仮説

ドキュメンテーションを通してこれまでの他児の活動を知ることで，幼児同士の関わりを深め，一緒に遊ぶ楽しさを味わうことができるであろう。

対象：学級全体　抽出児A

≪背景≫

様々なごっこ遊びを楽しんできた子ども達。そこで，ごっこ遊びをしている様子をドキュメンテーションとしてまとめ，掲示した。その後の学級活動の時間に来年度入園する予定の子ども達が遊びに来る体験保育があることを話すと，いろいろな意見が出てきた。意見を５つに絞り，自分がやりたいグループに分けると，Aは「折り紙プレゼントしようかな～」と言い折り紙コーナーの係になった。しかし，今まで製作物は全て大事そうに持ち帰っていたAにとって，頑張って作った物を知らない人にプレゼントするという点で気持ちが乗らず，「プレゼントはしたいけど，作るのは面倒だな…。」とコーナーの準備に参加したり抜けたりする様子が見られた。

そこで，簡単にできる折り方を一緒に探したりすることで，少しずつ気持ちが乗ってきた。そんな中，普段から一緒に遊んでいるFから「ボウリングを

写真７　掲示したドキュメンテーション

やった人に，折り紙プレゼントするのはどう？一緒にやらない？」という誘いを受け，ボウリングと折り紙プレゼントのコーナーが合流することになり気持ちがさらに上向いてきたかに見えた。

写真８　掲示したドキュメンテーション

≪エピソード≫

体験保育当日「ボウリングやりませんか」FやGが元気に声をかける中，Aは少し離れたところから様子を伺っている。他のコーナーも，それぞれ意欲的に声をかけ，遊びを楽しんでいる。友達数人が声かけや対応を頑張っているおかげで，Aがいなくても成り立っている状況を感じたのか段々とAのやる気がなくなってきていることが感じ取れた。「お友達も頑張っているから一緒にやってみない？Aが一生懸命作ったプレゼント，渡してあげたら喜ぶはずよ。」と私はAに声をかけるが，参加する様子が見られなかったので「じゃあ，やりたくなったら来てね。待っているよ」と声をかけた。少し経ち，体験児やお客さんで来てくれる子達が少なくなったタイミングで，私は「コーナーを少し片づけて誰でも遊べるようにしてみようか」と声をかけてみた。

写真９　ボウリングを楽しむ様子

すると，突然Aの表情が生き生きとし始め，きめつコーナーで使っている剣やお面を用意し始めた。何人か集まり，たたかいごっこが始まった。そこへ鬼のお面を被った先生が現れ，Aらは「鬼だ～，倒せ～！」と鬼に扮する先生に向かっている。この時のAの表情がとても輝いているように見えた。

写真 10　たたかいごっこを楽しむ A

≪考察≫

今までにいろいろな遊びを楽しんできたため，学級全体で楽しめる活動はないかと今回の検証を計画した。活動を楽しめている子も多い中，徐々に友達との関わりができるようになってきていたAにとっては，まだハードルが高かったのではないかと反省した場面である。

子ども達それぞれが遊びを楽しみ盛り上がりを見せていても，継続していく中で，やがて膠着した場面が生まれることを想定し，次はどのような展開を用意するか，どんな工夫が必要かを考える工夫が足りなかったと考える。Aにとっては折り紙プレゼントを友達と一緒に準備している間がこの活動のピークであったのだろう。Aと同じように遊びを紹介することができずに，ウロウロしている子が他にも何人かいた。

その中で，鬼役が現れるという子ども達にとっては新鮮な風が吹いたことで，鬼を倒すという新たなイメージは良い刺激となったと考える。

保育後の反省として，今まで友達同士で楽しんできたたたかいごっこをみんなで力を合わせて鬼を倒そうという流れにし，一つの目標に向かって協力する方向に持っていけたら良かったな，という思いがある。同時に，そうなった場合に備えてどんな声かけをした方が良かったのか，どんな準備をしたら良かったのか，という課題が残った。遊びが流動的で変わりやすい年齢だからこそ，遊びの連続性や新しい展開について備える必要性を痛感した。

④ドキュメンテーションを通して一緒に遊ぶ楽しさを味わえるようになった検証場面
場所：そよかぜ組室内、フリースペース

なんで俺達だけ？（12月８・９日）

活動仮説

友達と様々な遊びを楽しむ中で，自分の思いを伝えたり，相手の気持ちに気付いたりすることで幼児同士の関わりを深め，一緒に遊ぶ楽しさを味わうことができるであろう。

対象：学級全体　抽出児B

≪背景≫

体験保育に向けて，「レゴのコマが上手に作れるから，まわし方を教えてあげたい」と言い，ベイブレードコーナーの係になったB。Bはとても明るく前向きな性格で，同じ学級の友達だけでなく年長児にも友達が多い。好きな遊びの時間にも自分のやりたいことに向かっていき，遊び込むことができる幼児である。今回は得意なレゴで作ったベイブレードを教えてあげたいということでとても張り切っていたが，当日に向けての準備は全くしておらず，なんとかなるだろうという気持ちでいたようである。

写真１１　レゴブロックでコマを作る様子

≪エピソード≫

体験保育当日，準備をしていなかったBは，一緒にコーナーをやるGに声をかけ登園後すぐにコマづくりを始めた。コマを何個か作るとそこへ，自分の思いをまだうまく伝えることができないHがやってきた。

Ｈは手先が不器用で，普段から友達の作った製作物を壊してしまうことが多かったため，Ｂは Ｈを避ける傾向があった。この時もＨが来たことに気付くと，作ったコマを守るように隠し，「Ｈは来たらダメ！すぐ壊すのに！」と言い，Ｈに背中を見せた。ＨはＢに好意を持っているが，コマを隠されたことに怒りを感じたようだ。Ｈは周りにあったブロックを投げたり弾き飛ばしたりして，コーナーをめちゃくちゃにしてしまった。私がＨを静止し，「Ｂ困っているよ。使いたかったら『貸して』って言うんだよ。」と話し，Ｂに「ＨはＢの作ったコマすごいな，と思って見に来ただけかもしれないのに，なんで隠しちゃうの？壊すからダメって言っても，もしかしたらこれから来る体験の子にも，間違って壊しちゃう子がいるかもしれない。その時，Ｂは隠しちゃうの？」と伝えた。結局レゴで作ったコマは守れたものの，引き続き警戒して背中を向け続けるレゴコーナーに体験の子が来ることはなく，終了後に，「なんで俺たちのところにだけ誰も来なかったんだろう。」と落ち込むＢの姿があった。

そこで教師は，動画で撮影した体験保育の様子を子ども達に見せ，活動を振り返ることにした。動画の映像には，積極的にお客さんに声をかける子ども達の姿や，ボウリングコーナーで不器用ながらもピンを並べようと頑張っているＨの姿があった。それを見たＢは，「あっ！他のコーナーは看板がある！俺達，お客さんに背中向けてるな。だからお客さんが来ても気付かなかったんだ。それに，声もかけてないし…。Ｈだって頑張ってるのに…。」と考え込む姿があった。その後，「先生，看板作りたいから字書いてちょうだい！ペンでなぞるから。」と気持ちを切り替えたように明るく話すＢ。一緒にコーナーをやる友達を誘い，看板づくりを楽しんでいた。

写真 12 動画で遊びの振り返りをする様子

翌日，登園すると，張り切ってコマを並べるＢとＧ。動画を見て考えたのか，前日に看板を作った後，二人でコマをたくさん作っていた。カゴの中は様々なコマが並んでいる。

Ｈが来た時には，「Ｈ！このコマおすすめ！やってごらん？」とコマを貸す姿があった。Ｈが壊してしまった時には「いいよ，まだあるから大丈夫。でもちゃんと拾って持ってきてよ！」と声をかけている。体験保育の子や年長児も何人か集まり，元気よく「このコマはこうやって回すんだよ，やってみて！」と対応することができていた。

写真 13 ベイブレードコーナーでコマを紹介するＢ

≪考察≫

人との関わり方が上手で，今までたくさんの気の合う友達に囲まれながら遊びを楽しんできたＢにとって，様々な人と接することの難しさは自分の思い通りにいかない葛藤を味わえる良い経験になったと考える。これまでの経験から，仲良くできないと思い込んでいたＨの良さや，他の友達の好ましい行動を教師の話や動画を視聴することで再確認し，自分なりに試行錯誤しながら友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わえたのではないだろうか。

なんの問題もないと思われがちなＢのような幼児にも，様々な機会や他の園児と衝突する場面をあえて設定することで，楽しさだけでなく自分の思い通りにいかないもどかしさ・悲しさ・乗り越える喜びなどの感情を味わわせたいと考える。

⑤協同的経験を支える教師の援助となる検証場面　　場所：そよかぜ組室内、フリースペース

ワンちゃんお散歩ごっこ（12 月８・９日）

活動仮説

友達と様々な遊びを楽しむ中で，困難にぶつかり，その解決に向けて教師や友達の助けを借りながら試行錯誤を繰り返すことで，今後の活動に活かすことができるであろう。

学級全体　抽出児Ｃ

≪背景≫

体験保育に向けて「この前製作でワンちゃん作った時に，みんな『かわいい』って言ってくれて，友達みんなでワンちゃんのお散歩ごっこしたのが楽しかったから，Ｃはお散歩コーナーを作るよ。」というＣ。Ｃはおとなしい性格で普段は控えめだが，これをこうしたい！と思った時にはそれを貫き通そうと頑張る性格である。一緒にコーナーをやる友達は一人も集まらなかったが，仲良しの友達がいるきめつコーナーの横でなら一人でも大丈夫！と言い，お散歩コーナーをやることを楽しみにしていた。

≪エピソード≫

体験保育初日，きめつコーナーにたくさんの人が集まる傍で，本人が製作で作ったワンちゃんの散歩ひもを持ったＣが立っている。廃材の筒を口にあてながら「お散歩コーナーです。かわいいワンちゃんのお散歩してみませんか？」と声をかけている。

私が「どんなふうにお散歩させたらいいですか？」と声をかけると「初め

写真 14 廃材を使って声をかけるＣ

はワンちゃんも怖いと思うので，優しく撫でて下さい。それから仲良くなるために餌をあげて・・・。」と真剣に説明している。私がお散歩を終えると「また来てくださいね。」と言い，ニコニコしている。「ワンちゃんのお世話の仕方よく分かったよ。説明上手にできたね。他のお客さんも喜んでくれるといいね。」と私が褒めると，「うん，C 頑張るよ！」と笑顔で話していた。

しかし，その後お客さんがワンちゃんコーナーに来ることはなく，私は「お客さん来なくて残念だったね。先生はとても楽しかったから，明日はお客さんがたくさん来てくれたらいいね。」と声をかけて励ました。

翌日，家から別の製作したワンちゃんを持って登園した C。理由を聞くと，意外な答えが返ってきた。

「昨日どうしてお客さん来なかったんだろうっていっぱい考えたの。昨日までいたワンちゃんは少し大きかったでしょ？もしかしたら体験の子は怖かったのかもしれないって思ったんだ。だから今日はミニチュアのワンちゃんを連れてきたの。」小さなワンちゃんを大事そうに抱え，よしよしと撫でている C。他の友達も「C，そのワンちゃんもかわいいね！」「昨日はきめつコーナー忙しくて手伝えなかったけど，一緒に頑張ろうね！」と言ってくれている。その優しさに私はジーンと心が温まると同時に，子ども達の心が育っているように感じた。

体験保育が始まると，C は昨日のようにお散歩ひもをギュッと握りしめて様子を伺っている。私は「あの先生，とっても優しそう。ワンちゃんのこと大事にしてくれそうだね。」と耳打ちした。すると，C が勇気を振り絞るように，「かわいいワンちゃんです。お散歩させてみませんか？」とお客さんに声をかけた。声をかけられた先生が笑顔で「かわいいですね。どうすればいいの？」と答えると C も笑顔になり，散歩のさせ方を説明し始めた。一通り散歩を終えると「先生！お客さん 1 人目できたよ，嬉しい！また頑張って声かけてみる。」と言い，笑顔でいろいろな人に声をかけていた。体験終了後の振り返りでは「今日は 15 人のお客さんにワンちゃんを紹介できました。とても嬉しかったです。」と発表する姿があり，満足感に満ち溢れた表情の C であった。

写真 14 散歩ひもを握りしめる C

写真 15 お客さんに散歩の説明をする C

≪考察≫

検証日の翌日に C の母親と話をすると，実はお客さんが誰も来なかったことで C はとても落ち込んでいたとのこと。母親も「残念だったね，明日は誰か来てくれるといいね。」と励ましたところ，昨日は 15 人もお客さんが来たことをとても喜んでいたということだ。いつも友達を頼りに生活してきた C にとって，今回は初めての一人だけでの挑戦であった。一人だから難しいだろうとやめさせるのではなく，その子の気持ちややる気を信じ，できる限り援助することも教師の役割であると考える。

お客さんが来なかったことで悔しさや悲しさを味わったが，なぜ誰も来なかったのか？と自分なりに振り返り，解決方法を考えたことや，教師や友達，家族の励ましが C の気持ちを支え，勇気を出すことができたと考える。この成功体験が C の自信につながったように思われる。

教師や友達との信頼関係を基盤に，自分らしさを表現しながら友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わえるような教師の援助の大切さを改めて考えさせられたケースである。これからも幼児一人一人の気持ちに寄り添い，幼児の輝きを支えられる教師でありたいと思う。

4　検証保育研究会

（1）保育後の教師の感想

- 新入園予定児や年長児に「自分達の好きな遊びを紹介しよう」と登園後から張り切る姿が見られ，子ども達自ら「今日は衣装を着てみる」「テーマソングを流すと雰囲気がでるかも！」と話す様子が見られた。
- 学級の子ども達だけで行ったロールプレイとは違い，様々な要求が求められる中で，「どうしたらいい？」という問いかけに教師もできる限り一緒に考えるようにしたが，対応できずに活動が終わってしまった場面もあった。
- 初めは緊張して戸惑っている子もいたが，具体的な声かけに努めることで，落ち着いて対応することができていた。
- 遊びが途中で膠着した際に，次の活動への転換がうまくできなかった。
- 全体を見ることに手いっぱいになってしまい，一人で遊んでいる子や支援を要する子に対し，手立てがあまり取れなかった。
- 幼児に様々な機会や友達と衝突する場面をあえて設定することで，楽しさだけでなく自分の思い通りにいかないもどかしさや悲しさ・乗り越える喜びなどの感情を味わわせる体験もさせたい。

（２）指導助言（琉球大学准教授　岡花　祈一郎）

・これまでの検証の中で，活動の盛り上がりがピークであったように思う。幼児が前のめりになっている姿が見られた。
・役の制約が遊びの膠着を生む。友だちと一緒に様々な「ごっこ遊び」を楽しむためには「表現に気づく，受け止める関係性」をつくることが大切。本日は受け止める役割を果たすものが少なかった。
・年中学級の「ごっこ遊び」のなかで，保育者の役割が大切。「遊び」を一つの活動プロセスをとらえて，今子どもたちに何が必要なのかイメージをつなぐ，発展させる遊びの仕掛けやどのタイミングでどのような環境構成や支援が必要なのかを考える。
・遊びには一過性と偶発性という特性がある。遊びに変化を生み出すための保育者の仕掛け，見通し，受け止めを意識的に行う必要がある。
・遊びは繰り返していると飽きてくるので，教師が刺激を加えることが大事である。幼児の指向性を把握し，仕掛けをする。
・保育者の支援として，「表現の芽」「アイデアの芽」を見逃さない。
・その日の遊びの様子をテレビ画面に映し写真で振り返ることでイメージしやすく全体で共有する手立てとして良い。
・ドキュメンテーションを活用して子ども達に遊びの繋がりを可視化し，わかりやすくする工夫も見られ良かった。

５　検証のまとめ

（１）学級全体の変容

本研究では，「ごっこ遊び」を通して幼児同士の関わりを深めていくことを意識する保育を実践した。

○幼児と教師の信頼関係を築くために幼児を温かく受け入れ，幼児一人一人の思いに寄り添い，一緒に生活を共にすることで幼児の気持ちや欲求などの目に見えない心の声を受けとめ，幼児の内面理解に努めた。その結果，その子なりの姿や気持ちに寄り添う保育を行うことで幼児は受容される喜びを感じ，教師との信頼関係を基盤に自分なりに表現する楽しさを味わえるようになってきた。【検証場面①②⑤より】

○幼児一人一人が他の幼児との関わりを持ちやすい「ごっこ遊び」を楽しめるよう，絵本やペープサートなどを活用してイメージを共有し，イメージを表現するための道具や用具，素材を十分に用意することでイメージの世界を十分に楽しむことができた。【検証場面③より】

○幼児一人一人のイメージや表現をつないでいくために，写真や動画などのドキュメンテーションを活用したことで，他の幼児の活動や良さに気付き，幼児同士の関わりをさらに深めることができた。【検証場面④⑤より】

以上のような援助の工夫をしていくことで，学級の幼児ほとんどが人と関わる力が向上し，変容につながった。これらの変容には，エピソード記述を用いた保育の振り返りを通して幼児の心の動きを捉え，よりきめ細かい幼児理解に努めたことで，幼児一人一人の気持ちに寄り添い共感し，温かい言葉かけをする援助を行ったことが効果的だったと考える。

しかし，遊びが膠着した際どのような仕掛けをしていくか，という工夫が不足していたため，全ての幼児が一緒に遊びを楽しめたのかという点については，改善の余地がある。【検証場面③より】

公開保育翌日は入園予定児が大勢来園したが，入園予定児に対応する時間をできるだけ短縮し，幼児がコーナーを自由に行き来できる状態にすることで，それぞれの幼児がやりたいと思う遊びに没頭し，さらに遊びを楽しむことができた。これらのことを踏まえ，検証保育を計画・実施・分析する中で，幼児の姿から常に振り返りを行い，改善していくことで教師の援助が深まるものと考える。

（２）抽出児の変容

抽出児 A

・【検証場面①②より】必要に応じて教師が仲間に入り，幼児のしていることを言葉に出してつなげたり，一緒に遊ぶ物を提示したことで教師との信頼関係を構築し，友達と一緒にイメージをつなげながら遊ぶことができた。

・【検証場面③より】ごっこ遊びを通して学級の友達と一緒にダンスや歌を楽しんだり，自分の思いを相手に伝えられるようになった。

抽出児 B【検証場面④より】

・様々な葛藤を抱える機会をあえて設定することで，楽しさだけでなく自分の思い通りにいかないもどかしさ・悲しさ・乗り越える喜びなどの感情を味わう良い機会となった。

・教師の話や動画を視聴することで友達の良さや好ましい行動を再確認し，自分なりに試行錯誤しながら友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わえた。

抽出児 C【検証場面⑤より】

・悔しさや悲しさという葛藤体験を味わう中で，教師が幼児の思いを「温かい言葉」でつなぎ，さらに教師や友だち，家族の励ましにより幼児は達成感を味わうことができた。

・達成感を味わうことでＣの自信へとつながり，友だちとの絆を深めることができた。

以上のことから，「幼児が教師や友達と一緒に様々なごっこ遊びを通して，幼児同士の関わりを深める中で，幼児期にふさわしい遊びや表現活動を体験し，教師が援助の工夫を行うことで，幼児なりのやり方で試行錯誤を繰り返し，友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わうことができるであろう」という研究仮説が検証できたと結論づける。

Ⅶ 研究の成果と課題

１　成果

（１）発達段階的にも４歳児に遊びを継続させることは簡単ではなかったが、幼児の興味・関心に即した内容の「ごっこ遊び」を精選することで楽しく継続できた。

また，幼児の発達に応じて「ごっこ遊び」に使うモノの製作方法を工夫したことで幼児自ら製作を楽しみ，役になりきって表現することができるようなった。

（２）保育後の記録にエピソード記述を用いた分析や読み取りを行うことで，より深く幼児の内面を理解し，幼児のイメージを実現することができるようになった。そのような遊び込める環境を教師が設定することで，幼児の他者との関わりや遊びを活性化することができた。

（３）写真や動画によるドキュメンテーションを活用することで，幼児の遊びの様子を可視化できた。その際に活動を振り返ることで，他児の存在や遊びに気付かせ，様々な活動へ広げることができた。また，友達の感じ方や考え方，行動の違いに気付くことでお互いを認め合い，その結果，幼児一人一人の成長へとつながった。

２　課題と対応策

（１）学級内の小グループ単位でみると，友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わえるようになったが，学級全体での活動では消極的な幼児も見られた。このような幼児に対する手立てや援助の工夫に課題が残る。毎日の保育を計画・実施・分析する中で常に振り返り，教師の援助の工夫を継続して行い，学級全体に広がる遊びについて研究を深めたい。

（２）幼児の発達を促す「ごっこ遊び」を年間計画に計画的，系統的に位置づけ，園全体で組織的，計画的に環境構成を工夫していく。

〈主な参考文献〉

（１）大豆生田啓友　著　2020　『日本版保育ドキュメンテーションのすすめ』　小学館
（２）河邉貴子・田代幸代　編著　2020　『遊びが育つ保育～ごっこ遊びを通して考える』フレーベル館
（３）神長美津子　編著　2018　『３・４・５歳児の　ごっこ遊び』　ひかりのくに
（４）塚本美知子　編著 2018　『対話的・深い学びの保育内容　人間関係』　萌文書林
（５）宮里　暁美　監修　2018　『0-5 歳児　子どもの「やりたい！」が発揮される保育環境　学研
（６）文部科学省　2018　『幼稚園教育要領解説』
（７）小田豊・山崎晃　監修　2017　『幼児学用語集』　北大路書房
（８）吉田　元夫　2016　『保育学講座 保育のいとなみ一子ども理解と内容・方法』東京大学出版会
（９）鯨岡峻　著　2009　『エピソード記述で保育を描く』　ミネルヴァ書房